

1998年4月から19年間にわたって「広報こまつ」に掲載されてきた「みまつし、きくまつし 小松の方言」。最終回となる今月号では、加藤先生から執筆にまつわる思い出などを伺いました。

Q. 加藤先生が小松の方言を調べるようになったきっかけは？

平成8年度に博物館から方言調査を依頼されたことがきっかけです。金沢大学の学生と5年間で120あまりの集落を調査しました。

Q. 方言研究に興味を持ったきっかけは？

私はもともと農家の長男で、将来は農学部に進もうと思って、高校時代は理系を選択していました。しかし、3年のときに担任から「君は農業よりも教師に向いている」と助言され、祖父が教師だったこともあり、教育学部の国語科に進むことにしました。自分で言うのも何ですが、理系にいなから国語の成績だけは抜群によ

かったです(笑)。

国語科で近代文学を専攻するつもりで勉強するうちに、自分が「文学」にはあまり向いていないことに気付きました(笑)。そして、2年の夏に金沢大学のK先生の集中講義で言語地理学(※)を学んだことがきっかけで方言の研究に興味を持つようになりました。文献に載っている日本語ではなく、生身の人から方言を聞き取りながらその歴史や変化を考察していく、それがとても新鮮に感じられました。

※言語地理学…方言の現地調査を行い、その分布を言語地図に描いて言葉の変遷を考察する

Q. これまでの連載でたくさん話者や市民が登場していますね。

学生達と市内全域で地元の方と交流できたのが良い思い出です。中ノ峠で宿泊したときも、大勢の学生の食事を地元のお母さん達が作ってくれました。あのときの料理やお漬物は感動するほどおいしかったです。調査が終わると「今日はいっぱい方言がしゃべれて楽しかった」と喜んでくれる方も多く、連載の写真の撮影にもたくさんの方に協力してもらいました。連載当初赤ちゃんだった子が今や大学生ですから、我ながら長く続いたものだと思えます。

Q. 最後に加藤先生から市民の皆さんへメッセージをお願いします。

関西や九州など、若い人が今でも積極的に方言を使う地域に比べると、北陸は方言の衰退が進んでいます。家の中でも、子供や孫に遠慮して方言がしゃべれない

お年寄りが多いのは残念なことです。

そんな中で、この連載が消えつつある方言を懐かしむだけでなく、少しでも小松の方言を見直し、次の世代に受け継ぐきっかけになってもらえたらうれしいですね。グローバルな時代だからこそ地域を大切に、自分達の方言にも自信を持って次の世代へ伝えてもらいたいと思います。長い間、ご愛読いただきありがとうございます。ございました。